



NEWSLETTER

歯科保健医療国際協力協議会

事務局：〒390 長野県松本市横田3-10-13 TEL&FAX：0263-39-1583

発行：村居正雄 編集：駒津めぐみ 現会員数：220名

Japan Association of International Cooperation for Oral Health

平成7年度

国際災害緊急援助研修報告

宇野公男（歯科医師 東京都）

国際災害緊急援助研修を受ける機会に恵まれたので、レポートします。

この研修は2月19日から3月2日までの国立国際医療センターでの国内研修と、3月17日から4月1日までのコスタリカ、バルバドス、ハイチでの海外研修からなり、NGOで活動している医師3名、歯科医師1名、薬剤師1名、看護婦3名が参加し、NGOに災害時にコーディネートする知識を持たせる事を目的としてWHOと国際厚生事業団により実施されたものです。

国内研修ではWHOや赤十字社などの関係者を講師として、災害の定義や対象から難民キャンプの設営および運営などについてのノウハウを学ぶことができました。今まで災害という阪神大震災やピナツポ火山噴火といった自然災害を思い浮かべますが、今回この研修を受けてWHOとしては自然災害だけでなく、航空機事故や原子力発電所事故といったものから戦争による経済の荒廃といったものもいわゆるman-made disasterと位置づけています。この事をJAICOHにあてはめてみると、ボルボ後のカンボジアでの活動はまさに災害援助に該当すると考えられます。研修ではImpact, Reconstruction, Mitigation, Preparednessといった基礎知識だけではなく、例えば小学校をベースとしてどのようにテントや食料配給所を配置し、トイレをどのように設けるか、といった難民キャンプのコーディネートなど実践的なシュミレーションや、戦傷患者の銃創処置などをディスカッションを行いながら学びました。特に参考になったことは、食料などの供給にしても必要最低限

（実際量はキャンプで1週間すごすか1ヶ月すごすか、小児や成人など場合によって異なる）のみ供給しないと依存が生じて自立が遅れる原因となることなど阪神大震災後の日本で問題になったことが整理されていることに驚きました。最近日本でも確立してきたTriage（ふるい分け）についても実際は日本で考えられていることとは異なり、もともとは戦時において最も効果的に戦力を温存することに関連しており、つまり確実に助けられる者（戦力として復帰できる者）から助けるために行われたことです。助かるかどうかわからない1人の重症者に手持ちすべての輸血血液を使用するより他の5人が助かれればその重傷者には使用しないという選択を意味しています。場合によっては本来優先すべき重傷者の処置をせずに見殺しにしなければならないことに対して他の参加者からも納得できないとの意見続出でした。限られた医薬品や人的資源で最大の効果を求めるためにはしかたがないことかもしれませんが、何か割り切れない気持ちが残りました。また、日本ではTriageは医師が救護所などで行うことが多いと思いますが、大災害時に一人でも多くの医師を治療や処置に従事させるべく、Triageを歯科医師が行い、物資の調達などは薬剤師が担当するといった人的資源の有効利用についての話しもありました。今まで、歯科医師として災害においても頭の中に歯科治療が第一にありましたが、こういったコーディネートの分野で役立てる（他国では役立っている）能力をそなえることにより、別の分野で能力を生かせる可能性を見つげられたように思います。

海外研修としてコスタリカでは南北アメリカ大陸を対象として災害援助協力を行っているPAHO (Pan American Health Organization) の災害本部を訪れ、特に歴史的にもハリケーンや地震の災害の多い中米での状況について学びました。バルバドスではPAHOが実施している災害研修に中南米の参加者と共に参加しました。ここではバルバドス国軍の基地内で兵士を被災者として、航空機事故や、地滑りといった災害を想定しての救助訓練を行いました。各

国の医師や警官、消防士などの混合チームなので災害本部からの命令伝達の困難さや、それぞれの思惑の調整などまさに国際協力現場の雰囲気そのものでした。私も現場で負傷者運搬の優先順位決定などを行い、良い経験ができました。ハイチでは内戦後の経済もインフラも荒廃した状態でのPAHOや各国のNGOの活動を見学しました。ここでは内戦により医薬品やそれを運搬する燃料の供給が途絶えてしまったのでPAHOがPROMESSという物資供給組織を作り、最初は無償供与から開始し、次第に安価での供給へと変化させている医薬品の供給システムを見学しました。いわゆる富山の置き薬制度で、資金の無い病院に必要な医薬品をまず供給し、使用した分の料金を徴収することも行っていました。このPROMESSを担当している方は薬剤師でした。また歯ブラシからパーにいたるまでストックがあり必要に応じて供給されていたので、もし我々が活動する時でも簡単に調達できる訳です。これも将来には、ハイチ政府に委ねられることになり、結果として自立への協力であるとのことでした。そのほか赤十字社による救急車運営事業（日本では消防庁）や、MSF、NGOによる小学校での給食活動などを見学し、勤務医としては休みを取ることがなかなか困難でしたが、大変良い経験ができました。この研修は今後も引き続いて実施されることですので、歯科関係の方も是非参加する事をお勧めします。



1996JAICOHソロモン諸島国

活動報告

追川 基樹

(歯科医師 群馬県)

JAICOHは、これまでカンボジア、ソロモン諸島、タイ、中国などに対して歯科保健協力活動を行ってきた。特にソロモン諸島に関しては、1990年WHOの依頼により短期専門家を派遣して国際比較調査を行って以来、これまでに5回のミッションを派遣してきた。活動の内容は、小学校・幼稚園での歯科保健指導、巡回診療、ホニアラ中央病院歯科室の器材整備、歯科疾患疫学調査、歯科関係者への技術指導、歯科技工士養成の奨学金供与、食生活の変化に関する実態調査などである。ソロモン諸島には1993年から歯科衛生士、1995には歯科医師の青年海外協力隊員が赴任しており、彼らの活動に対して歯ブラシの提供などによる支援も行ってきた。

今回は 歯科技工班 8月10日(土)～8月17日(土)
 歯科医療班 8月24日(土)～8月31日(土)
 生活の交流班 8月24日(土)～8月31日(土)

という3つのチームで、ソロモン諸島国でそれぞれ支援活動を行った。

参加者は歯科医師、歯科技工士、歯科衛生士、学生、栄養学教授、家政学・被服講師、農村生活改善指導員といった多彩なメンバー14名が参加であった。

それぞれの活動ポイント


- (1) 歯科技工班
- ・ソロモンの歯科技工の実態を知る
- ・ソロモン歯科技工士との交流
- ・歯科技工技術のデモンストレーション
- ・ソロモンの人々が入歯に対してどんな思いを持っている

どんなときでも
 短時間でセッティングできるケースから時間のかかるケースまで
 どんなときでもCXが対応します。

HY材配合

ハイボンド 承認番号 04B第601号
グラスアイオノマーCX
 歯科接合用グラスアイオノマーセメント

株式会社 松風
 本社 ●〒605京都市東山区徳福上高松町11-TEL.(075)561-1112(代)



かみ能力を高めて、全身丈夫に！ ☆推薦/日本歯科医師会・日本咀嚼学会
歯科教育ビデオ ●監修・指導/齋藤 滋(神户歯科大学教授)

8020 咀嚼とからだの健康 (全2巻)

1巻 14,500円(税別)
 噛むことと顎の発育、全身への影響、噛む力を強くするための食事などについて昔の人との比較、動物実験、献立のポイントなどを紹介してわかりやすく解説。(母親、子供向け/20分)

2巻 14,500円(税別)
 食べ物をよく噛むことは脳の老化を防ぎ成人病の予防にも役立つこと、高齢者の食事の献立、義歯や痴呆症との関係、口腔内の衛生等々、噛むことと成人のからだの健康について具体的に解説。(一般向け/20分)

株式会社 デンタルダイヤモンド社 〒113 東京都文京区本郷3-18-16 岩片ビル
 TEL.03-3814-9101(代) / FAX.03-3814-9105

EX slimhead



DENT. EX slimhead ←フードは歯磨剤です。
 株式会社 ライオン歯科材料株式会社

るか調べる

- ・ソロモンの人々の生活を知る
- ・歯科技工士養成奨学金の供与（3年目）と学生の状況について報告を受ける

(2) 歯科診療班

- ・マキラ州ワイマプールのセカンダリースクール学生の歯科検診と診療
- ・学童の生活調査と歯科保健指導
- ・キラキラの病院と歯科クリニックの見学
- ・ソロモンの歯科医療について関係者と協議する

・ソロモンの人々の生活を知る

(3) 生活の交流班

- ・ソロモンの人々の生活に触れる
- ・「開発」の実態を知る
- ・様々な立場で「開発」と「生活」の問題に取り組んでいる人々と交流する
- ・現地の食事作りを体験し、信州の伝統食を現地の食材を使って共同で作る
- ・集落の自治や運営について知る

以上のポイントを中心にそれぞれ活動を行ってきた。これ

からもソロモン諸島国の人々との関わりの中に自分の存在定義を感じながら、地道にNGO活動を続けていくことが大切なことであろう。

JAICOHの今後のソロモン諸島国でのあり方についても得ることが多くあったツアーでもあった。息の長いソロモン諸島国での支援活動を模索していくつもりです。

— 検診をして —

口腔内から見えるソロモン

安野 志乃

(歯科医師 長野県)

1996年JAICOHソロモン諸島スタディーツアーの主な活動地はマキラ州ワイマプールのセカンダリースクールだった。首都ホニアラから9人乗りのプロペラ機で1時間その後トラックで川を3本横断し、到着したのは緑の豊かな敷地に立つとても広々とした学校だった。毎年進級試験があり、落第すれば自分の村に帰されるという非常に厳しい学校なので、卒業後はトップクラスのエリートになるのだそうだ。さて、その子供達の口腔内は……。

検診はチームリーダーの追川先生と土持先生、私の3名で行った。その中で、歯周組織の検査はその項目だけを1人が全校通してすることになった。それを私が担当したので全生徒の口腔内を見ることができた。おおざっぱに言えば“良い”と“悪い”の差が大きいということを感じた。“悪い”方は重症の虫歯と歯肉炎。ところが“良い”子は驚くほどきれいな口腔内をしている。ピカピカの歯面と歯肉、良く使っているなぁという感じでしっかり噛み合っている上下の歯からはストレスのない、自然さを感じた。この差はやはり入学する前の食生活の違いだと思う。何とか全部の子供がああ健康的な口腔内を持っていないものか。私は、そのお手伝いをしたいのだと実感した。

HOME CARE[®]ですこやかに
 歯と歯ぐきにやさしい



ホームケア歯ブラシでホームケア

株式会社 永山 TEL 0723 69-4188 FAX 0723 69-8858 03-0120-118418

**ベストセラーの
モデルチェンジ** GC

歯肉の修理やデンボラークラウン、レジン歯固トレーの製作などで好評のユニファストがさらにレベルアップして新登場。従来の常置型レジン欠点とされていた色調の不安定性、重合時の変形を軽やかに解決。黄変や色調の経時変化を極限まで抑えました。

(テックの製作が迅速・簡単に) 超強度性常置型レジン
 (優れた色調マッチングと耐染色性) **ユニファストII**

スターセット(3-1P) 承認番号05日衛0822号

20g・50g・100g 増量25g A2, A3, B0 (ライブピンク) 各1本, 20g (100g) 1本, ラバーカップ2個, 粉米計
 歯輪1個, 設計書1個, プラスチックヘリ1本, 小輪1本, 透視/ズル付キヤップ1個, カップホルダー1個 ¥9,800
 ※掲載の取扱説明書は、'95年4月現在のもので(消費税は含みません)。

株式会社 ジーシー 本社/東京都港区東区76-1 〒174 TEL(03)3965-1221
 GC DNC/東京都文京区本郷3-2-14 〒113 TEL(03)3815-1511

携帯用マイクロモーター

VIVA-MATE III 2,000~30,000 rpm
 (ビバメイトIII) 承認番号(08B) 第0561号

- コンパクトで持ち運びが簡単に行えます。
 - ・出張診療, 在宅診療, 集団検診
 - ・電源から離れた場所での治療
 - ・停電時の応急治療
- ユニットに組み込まれたフィードバック機構により
 抜群のねばり
- ISO規格のハンドピース、コントラングルが装着可能
- 正逆切替可能

NSK株式会社 ナカニシ

本社・工場 〒322 栃木県沼田市上日向340 TEL:0289-64-3380 FAX:0289-62-5638
 東京事務所 〒110 東京都台東区上野3-19-4 サカイビル3F TEL:03-3835-2907 FAX:03-3835-4332

「ハロウ・ありがとう」

から得たもの

池田 玲子

(農村生活改善指導員 長野県)

この旅は多少の予備知識や常識は全く通用しない出来事ばかりだった。

まず「ハロウ」「ありがとう」の二語を連発し、あとは身振り手振りを使うだけの私を、どの村の子供も何の警戒心もなく我先にと迎えてくれた(一瞬、占領軍のチューイングガムに群がった子供時代を思い出したり、彼らが差し延べてくれる手に振れる事をひるんでしまったことを、本当に恥ずかしく申し訳なく思うのだが)彼らの瞳の中に日本の子供がとうの昔に失ってしまった何かを見、子供は村の宝物として育てられていることを知った。

しかし、この娘が成人し、結婚した時には、かつて「牛1匹嫁1人」といわれた、50年前の日本があることを知りショックだった。そして朝夕の教会で彼女らが何を祈るか知りたかったし、戦後の日本の女性達が生活改善運動や学習活動を通して、男性とのパートナー時代を迎えようとしている体験を伝えながら、彼女達を激励したかった。(そうした意味で青年海外協力隊の伊藤先生・吉田さん達のお仕事の大切さを少々理解出来た気がするのだが)

化学肥料や農薬を排した農方、市場の開き方、料理、屋敷回り案等を見聞きさせて頂きながら、ソロモンの人々の心意気と宝物に出会い、改めて自分達の失ったものの点検を試みようと思いついた。

こども達の目は輝いています。明日を信じているのです。

ソロモンでの食事作り

内田 美代子

(農村生活改善指導員・長野県)

ソロモンの人達と一緒に調理をしたのは、ポーナ村とホニアラ郊外のスブスブガーデンの2か所です。ポーナ村は車で行かれず、カヌーで往復した程ですから、電気・水道・ガスはありません。

現地の食事と日本食の両方を作るのだと思っていましたら、郷土料理は家で作った物を持ち寄るので和食を紹介して欲しいとのこと。燃料は薪で、調理設備や器具も限られています。そこで、簡単にできる味噌汁を作りました。材料を入れたお鍋を石にのせ、娘さんが地面の上で上手に小枝や薪を燃やしてくれました。身近な資材を利用してかまどを普及したらどうでしょう。

スブスブガーデンでも味噌汁の講習会だけでした。やはり薪を使っていましたが、ブロックを積み、鉄板が挟んでありました。煙なくて熱効率がよく、立って炊けます。それはともかく、水道があったのにはびっくり。都市と地方の格差を痛感しました。これでは都会に憧れ、集まって来るのは無理ありません。

マライタ島のフィユ村でも同様、持ち寄った料理はどれも美味しく、手間ひまかけて作られたものでした。暖かな心のこもった味は生涯忘れないでしょう。

スケーリングをする・される方は初めての体験で緊張



向上心があふれている

田口 聡

(歯科技工士・東京都)

出発前に言われた事。「ソロモンの人達はそんなに仕事熱心じゃない」一人で気負っていた僕はそんな言葉にがっかりしてしまった。そして、現地に着いての第一報。3人来るはずの技工士だったけど、1人は休暇を取ってどこかに行ってしまった。もう1人はお金が無くてホニアラまで来られなくなった。出発前に聞いたあの言葉は本当だったんだと思いきや消沈気味にセントラルホスピタルに向かったのです。

ところがそこでは、ただ1人だけ残っていた技工士がニコニコしながら握手して来たのです。

彼の名前はアルフレッド。彼に実技指導のスケジュールを伝えてみると、あれもやってくれ、これもやってくれとリクエストがどんどん増えていった。そこで思った。相手が一人で良かった……と。

ソロモンの技工事情というのは義歯のみである。しかもクラスプレスである。1本義歯でも上下顎共に全部床と同じ形態である。残存歯全てのアンダーカットを利用するのだ。あれでは患者さん自身大変ではないだろうか。口腔内いっぱい床に1本の人工歯。もっと小さくならないだろうか？ 患者さん、術者に共通している不満であり、要望のようであった。

そこでワイヤークラスプの実技指導をメインとした。アルフレッドは本当に器用で、試行錯誤しながらも3本目には単純鉤を僕のヘルプなしで1人で仕上げた。今まで曲げた事なんてないと言っているのである。驚いてしまった。ポロの出ない内に退却した方がいいなと僕は焦った。

遊びのつもりでインレーをワックスアップさせてキャストもしてみた。これは人気でいろんな人達が側で見ている。今日のツタディ・ツアーの一行。皆元気に帰って来ました。



不思議なことにキャストができるシステムが揃っている。しかしソロモンではキャストなんてしないらしい。義歯だけだから。そして一番重要な事だが、材料不足の問題があるのだ。

HJKをリクエストに応じて指導した。日本で言うところのTEKであったが、歯台を形成して人工歯を利用して作らせた。これが一番人気であった。人だかりができてしまったのである。1本の歯を失って、何とか義歯ではない回復法のヒントとして彼らは興味があったようである。

ソロモンの人々は仕事熱心だった。向上心があったというほうが適切か。見知らぬ土地に一人放り出された事は自分にとって本当にいい体験だった。

その機会を与えて下さった村居先生、JAICOHの会員、そして快く送って下さった佐藤歯科医院の院長夫妻に心から感謝いたします。ありがとうございました。

「見たい、知りたい」

からはじまって

三田 コト

(短大栄養学講師・長野県)

南太平洋の「楽園」ソロモン諸島！ 私のソロモン行きは「見たい、知りたい、行ってみたい」から始まりました。

村居先生は、食物栄養学専攻で、食生活に関心がある私を、JAICOHのソロモン協力活動に役立つことを期待して、この活動にお誘い下さったのです。「行きます、行きます！」と行って付いて行った私は、ボランティアとか保健活動の支援とかをみんな案通りして、今楽しく交流を始めています。

今回のスタディーツアーは3度目のソロモン行きでした。歯科関係の皆さんは、歯科保健指導や検診、治療、歯科技工等々ニーズのあるところへすぐ役立つ活動が展開できるようなのですが、生活班のほうは単なるお節介りとなって、浮いてしまいそうです。目標は、生活レベルの交流から、より良い暮らしのために情報を交換し合って、友好を深めお互いに生活改善を目指すことなのです。JOCVの伊藤先生のご尽力で、2つの村に1泊ずつできました。ホニアラ市では、スプスプガーデンプロジェクトを進める会と交流しました。スプスプガーデンでは2名の大臣出席で盛大な歓迎セレモニーがあり、ガーデンの野菜・芋を使った会員の手作りで賑やかな交流会をしてくれました。私達も持参の干椎茸・凍り豆腐・味噌にガーデンの野菜をいただき

て「味噌スープ」を作りました。カマド、レース編み、ダイエット、バランスミールなど話し合いました。

ジープで1時間半、しけの湖をカヌーで3時間、徒歩で40分かかったポーナ村は、カスタムガーデニング（有機農業）で村作りを進めていました。服を着た人も上半身裸の人もありました。履物を履いた人は居ません。みんな生き生きしていました。男性も子供を抱いて居たり、調理したりするようで、調理をして見せてくれました。JOCVの吉田さんが同行してくれて大助かりでした。リーフハウス、川のトイレも体験しました。

フィユ村は1995年に稲作をした村です。マザーズユニオンがあり、歓迎ミーティングがありました。料理を持ち寄って夕食交流会をし、吉田さんの通訳で賑やかに話し合いました。池田さん考案の箸使いのゲームが人気でした。「我々を尊敬して（認めて？）くれて、対等に話し合ってくれて、日本人は皆あなた方のようなのか、素晴らしい。」と喜んでくれました。吉田さんのリーフハウスに泊まりました。皆さんに大感謝です。

ソロモンの街と人々について

土持 師

（歯科医師 愛知県）

1年振りにソロモンに到着した。たかだか1年でそう変わるはずがないと思っていた。事実ほとんどが懐かしい光景であったがよく注意してみるといろいろ変わったこともある。衛星放送受信アンテナの設置したモーター、電気の停電が少なくなったこと、国内唯一の歩道橋ができたこと（ただし利用者は少ない）、都心部の交通量の増加、市場はまだ改装中であったが屋根のある野外市場を作る予定らしい。（これを野外とかどうかは知らないが）ゴルフ場は値段が5倍になったそうだ。

ただこれはやはり首都ホニアラが外国の意図的な介入及び自然な文化の流入の窓口となっているからかも知れない。ソロモンの他の場所（といっても2・3の場所しか知らないが）に浸透しているわけではなく、また全員が受け入れるわけではない。まだまだ裸足の人も多く固有の文化も残されている。

これからもソロモンは少しずつ変わって行くだろう。そして文化の受け入れ具合により、その人の新しい生活スタイルができていくだろう。それも素晴らしい事だが、固有の文化もそのままの形で残されていくといいのになぁと私は思う。

ポスターも手作り。熱がこもる⇒

20歳の夏

金田 千恵

（歯科衛生士 新潟県）

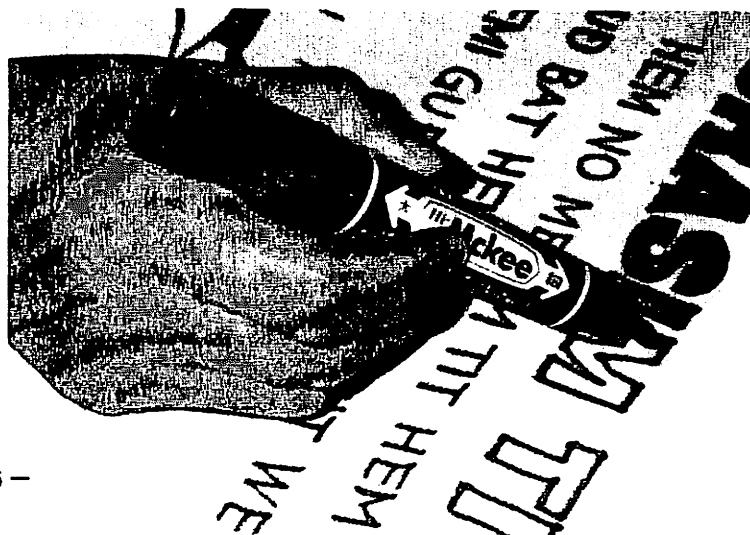
ソロモンから帰国してそろそろ2ヶ月になる。日本での現実生活への復帰にはかなりの時間を要したが、今では終了論文の作成や、研究会の準備に追われ忙しい毎日を送っている。ソロモンは夢だったのだろうか…と時々思うことがある。～あれは7月下旬のこと～

保健指導の媒体を制作することが、出発前に与えられた仕事の一つだった。道具を買い揃えた前日まで、他の国での国際歯科交流に参加していたので私には10日間しか時間がなかった。5メートルの長い布地との戦いはこの日から始まったのだ。

歯科検診を行うワイマプールは、降水量が多いなどという気候の面から考えて紙ではなく油絵のキャンバス地にしたり、人種を考慮して顔を茶系で塗ったり根気だけではなくなかなか続かなかった。布が厚くて書きにくい、ピジン語は理解できない、頭はまだ外国ボケしている、といった劣悪状況下で時間だけが過ぎて行ったのだ。毎日頑張った甲斐もあり期限までに無事完成させることができたが、字が小さかった事もあり現地では展示用のポスターとして使う事になった。検診中は、立ち止まって眺める生徒の背中が視界に入る度に頑張ったあの夏が無駄ではなかったと嬉しく思えた。また、2日間の検診では除石も行わせて頂き歯科衛生士としてとても勉強になった。

こんな風にして20歳の夏を終えた。サーフィンと国際協力に燃えた夏だった。黒くて現地人に間違えられたりもしたが、今までで最高の夏だった。これから1年の研修を終え歯科衛生士として社会に出ていくことになるが、国際協力で学んだ事を活かしこの夏の経験を無駄にしないよう頑張っていこうと思う。

そして秋、現実生活に戻った私は、改めてこれからやらねばならぬ課題の多さに気付き途方に暮れているのだった。



ソロモンB村に見る 暮らしの原点

森 かをる

(被服学 長野県)

道路の終点からは、海岸をはるか右手に見ながらカヌーで3時間、更に河口から流れをさかのぼって30分、ようやく陸地に降り立った。船着き場には大勢の村人達が出迎えてくれた。

寝袋やマットまで入った大きな荷物は、子供がそれぞれに背負ってくれて、あっという間に姿を消した。

ひと一人がやっと歩けるぬかるみの道が熱帯雨林の中に続く。ぬかるみに足を取られそうな私を見かねてか、1人少女が私の手を取ってくれる。裸足の彼女はぬかるみの中を歩き、私には茂みの中を歩くようにすすめてくれる。歩くこと1時間半、やっと目指すB村に辿り着いた。

どこのキッチンハウスにも火が焚かれ、私達のために持ち寄る夕げの用意が始められていた。

私達が泊まる家は、村外れのカスタムガーデンに隣接する高床式のリーフハウスであった。村の女性がトイレに案内してくれた。川の流れに2本の丸太を並べただけのトイレは、私達のために杭を垂直に打ち込んでつかまれるようにしてくれてあった。川は木立ちの向こうにあった。そこに辿り着くまでもぬかるみのため、ここにも2~3本の古い丸太が並べられていた。男性用は左側にしっかりと周り込んだ場所に在り、こちらには男性は絶対に来ないから、と説明された。

考えた揚げ句、私は流れに背を向けることにした。足元を見ると、丈の長い美しい緑の水草がなびき、水はゆったりと流れていた。

思い切ってやってみて

植田 明子

(歯科衛生士学生 千葉県)

今年の夏はうまい具合に条件が揃い、まるで運命の神様に「ソロモン」へ向けて背中を押された格好だった。

今思うと、行ってからより行く前の方が大変だったように思えてならない。環境も生活習慣も違う異国で、その地に合った保健指導を行うことはとても難しい。多くの人を巻き込み、悪戦苦闘の末、1枚の英語のシナリオと小道具を携えて「ソロモン」へ乗り込んだわけだが…。彼らの

明るさ、ノリの良さ、頭の良さに助けられた!

やはり国内に3校しかない国立中学校だからか? 反応も良いし、話しに耳を傾けてくれる。悶々と考えて不安がより、やって見なければ判らない。何ごとも! まさに「案ずるより産むが易し」。保健指導の回を重ねる度に、そして、彼らとの交流が深まるにつれ、少しずつ指導のポイントも見えてくる。人間には本当に“適応性”だとか“学習”する能力が備わっているのだ。

短期間ではあったが、私には妙な充実感と、沢山の新しい課題が与えられ、自己満足といえればそれは否定できない。ただ、将来のソロモンを背負う彼らにも「ハブラシ」だけでなく、心に「何か」が残ったことを私は願って止まない。

楽しかった

ソロモンスタディーツアー

間島 孝子

(歯科衛生士学生 東京都)

歯科保健指導を受けた経験のないソロモンの中高校生に対して、歯科衛生士学生がどこまで出来るのか、だれも予測できない冒険を行うため出発しました。

結果は大成功!! でした。

歯科保健指導を通して、とても楽しい交流ができました。ほんの短い時間でしたが、口腔衛生の話をきっかけに、お互いの文化、生活、価値観の相違を知ることは、まるで新しい宝物が増えたような喜びでいっぱいでした。

同じ学生同士ということが、良い方向に作用したようです。始めからお互いに親近感があり、フレンドリーな雰囲気の中で保健指導をすることができました。私達のつたない英語も何のその、お互い相手を知りたい、伝えたいという気持ちが通じあって、質問も活発に出され、話しも盛り上がり、女の子同士では、ボーイフレンドの話まで発展しました。全体を通して共通した話題・質問は、学校で禁止されていること(煙草や酒)が口腔内にどんな影響を及ぼすかという話でした。気になるコトは、日本の中高校生に似ていると思えば益々親近感が湧いてきました。

わいわい、がやがや元気な彼、彼女らはキラキラした瞳と笑顔で私達を迎え、共に楽しい時を過ごしてきました。

まだ話したいことが沢山あります。現地で追川先生の写した子供たちの写真も沢山あります。もっと知りたい方は、どうぞ私に声をかけて下さいませ。お話しします! そして次は、あなたが体験をする番です!

ソロモン・スタディーツアー

を終わって

村居 正雄

(歯科医師 長野県)

今年のソロモン活動は14名の参加者を得て、それぞれに充実感を持って頂けたと考えている。チームリーダーの追川先生を中心に、まとまりの良いチームワークを組めたこと、多くの方々のご支援を頂いた結果と心から感謝申し上げたい。

特に現地のJOCV事務所高岡所長、野々村調整員、そして伊藤、萬谷、吉田3隊員には準備の段階から終了まで病院、学校、村等との連絡調整をしていただき、また貴重なアドバイスを頂いた。参加者自身も、青年海外協力隊員が途上国でどの様に苦勞しているか、その様子を目の当たりに体験できたことはプラスになったのではなかろうか。教育省に対して技工士養成の奨学金の活用状況を報告させる件では、在ソロモン日本大使官の野本大使と職員の方々にも大変お世話になった。

ソロモン保健省の歯科担当官Dr. Pita Faruを始め、ホニアラ中央病院歯科スタッフ達、そして農村開発のNGO-APACEのMr. Joini Tutua, Mr. Tony Jansenの協力にも心から感謝したい。そこには肌の色や国籍を越えた共感があった。

国内でも(財)地球市民団体、上田東ロータリークラブ、カルディア会、診療所に来院する患者さんなど多くの団体や個人の方々から、助成金を頂いて、ポータブル・エンジンやグラスアイオノマー・セメント、歯ブラシ等ソロモンへの器材供与が可能となった。スタディーツアーは、多くの方々との協働作業である事を改めて強く感じている。

簡単な同診・口腔内健康チェック島の人々は真剣に集まる



役員会報告

9月16日(日)東京歯科大学病院図書室で、平成8年度第1回役員会が開かれた。新役員となって初めての会合でもあり、自己紹介の後会長挨拶、会務報告、カンボジア、ソロモン活動報告があった。

村居会長からは、これまで6年間の活動を振り返って、日本の歯科界に国際保健の位置付けが成されつつあるとして、その幾つかの事例が報告された。今後は、NGOのアマチュアリズムと専門性をどのようにバランスとっていくか、またGOとの共働作業の必要性などが強調された。

協議では、事務局より提出された「JAICOHの今後への提案」を叩き台に、活発な議論がなされた。今年度は会員からの提案によって全国5か所で研修会を開催することになっており、地域の人々との交流、日本の国内問題へのフィードバックなどが新たな試みとなっている。また、カンボジア、ソロモン活動も従来からの継続と共に評価に重点を置くこととなった。

「何のための国際協力か」「JAICOHの目指す国際協力とは」もう一度原点に戻っての問い掛けがなされた役員会であった。

編集後記

いよいよJAICOHのホームページがスタートしました。最近インターネットが主流になっておりますが、国際協力の分野では、インターネットが普及する以前か、パソコン通信を応用したネットワークが結成されております。APC (Association for Progressive Communications / 進歩的コミュニケーション協会) は、国連から高い評価を受けているネットワークです。APSに入れば、世界中の人々や市民運動団と学びあい、ともに活動することができます。現在、APCのノートを日本に作ろうとする運動があり、将来が期待されています。(大鶴)

17号は出来上がって見るとスタディー・ツアー特集となりました。他にも原稿を頂いていたのですが、今回は割愛させていただくこととなりました。スタディー・ツアー参加者のそれぞれの観点から、独自の感想が寄せられたことは、今後の活動の大切な情報になります。皆さん貴重な体験をされていることが、次の活動につながる何よりのきっかけになるのではないのでしょうか。「何もできないから」と引込み思案にならないで、積極的な活動をしてみませんか。海外だけに限らず、きっと役に立つことがあるのです。

最後に、発行が遅れましたことお詫び申し上げます。皆さんどうぞ良いお年をお迎えください。(駒津)